八代を創造（たがや）した石工たちの軌跡（せき）

石工の郷に息づく
石造りのレガシー

熊本県八代市

かつて全国で築かれた「めがね橋」を今も多く見ることが出来る熊本。それらの多くは、八代で生まれ育った石工たちによって手掛けられました。

彼らの卓越した手腕は日本各地で必要とされ、「神田筋違橋（萬世橋）（東京都）」や「通潤橋（熊本県山都町）」などの架設を成功に導き、全国に名声を轟かせるまでに至りました。それ故に、八代は多くの「名石工」を輩出した「石工の郷」と呼ばれています。

石工たちは、八代に広大な平野と豊かな実りをもたらした「干拓事業」や、地域の交通を支えた「めがね橋」の架設などに携わり、八代の発展と人々の生活基盤づくりに長きにわたって貢献する中で、己の技を磨き上げ、名もなき石工から名石工へと成長していきました。

彼らが築いた堅牢な干拓樋門、川面に美しいアーチを描くめがね橋、見事な棚田の石垣などの石造りのレガシーは百余年たった今も、まちの景観や人々の暮らしの中に生き続けており、訪れる人々を「石工の郷」へと誘ってくれます。

日本遺産認定日　2020（令和２）年6月19日

八代市日本遺産活用協議会事務局（八代市文化振興課内）
☎0965・33・4533

雑誌「月刊九州王国」特別編集

令和３年度
文化庁文化資源活用事業費補助金
（観光拠点整備事業）

八代（やつしろ）の石工が築いた町

２０２０年、熊本県八代市の「八代を創造した石工たちの軌跡〜石工の郷に息づく石造りのレガシー〜」というストーリーが日本遺産の認定を受けた。熊本県には江戸後期から昭和にかけて架けられた「めがね橋」約３００基以上が現存しているが、〝石工の郷〟と銘打っている通り、それらの架橋の多くに八代地域出身の石工たちが携わっている。何故、八代は多くの優れた石工たちを輩出することができたのか。また、石造りのめがね橋が八代に集中して架けられたのは何故か。石工の郷を巡り、その軌跡を追いかければ、現代に至るまでこの地で守り継がれてきた匠たちの誇りに出合えた。

川に丈夫な橋を架けよう。
母のため、故郷のため
帰りたい場所に渡れるように。

渓に丈夫な橋を架けよう。
子のため、未来のため
行きたい場所に渡れるように。

笠松橋（熊本県八代市東陽町河俣字久木野）

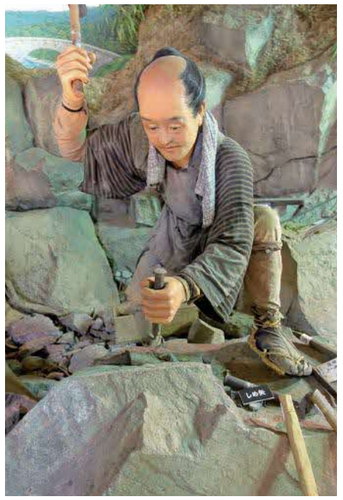
現在は崩落の危険があるため周囲にフェンスが設置されており、その外側から見学できる。周囲は住宅地なのでマナーに則って見学を
■白髪岳天然石橋
熊本県八代市東陽町北五反田

石工の郷、八代へ

石のアーチに魅せられた先人たちの情熱

天然のアーチが石工たちを見守る

八代市の山間部、東陽（とうよう）町。八代市内に現存している46基の石造りのめがね橋のうち、半数近くがこの町に集中している。東陽町の種山地域では、かつて多くの石工たちが生活を営んでおり、熊本県山都町の通潤橋架橋に携わったり、明治政府に招聘され東京の「神田筋違（かんだすじかい）橋（萬世橋）」を架橋したりした橋本勘五郎など、江戸から明治にかけて活躍しためがね橋造りのレジェンドたちも、この地を拠点に活動していた。そんな東陽町にまたがる白髪岳の麓に、「白髪岳天然石橋」がそびえ立っている。草に覆われた、まさに石工の郷のシンボルともいうべき堂々たる姿は圧巻だが、これは人が架橋したためがね橋ではない。岩盤が何万年という雨風の浸食により削られ、穴を穿たれた自然の造形物だ。しかし、めがね橋を架橋した石工たちの拠点地域にこの不思議な天然石橋が存在していることは偶然だろうか。石工たちはこの天然石橋の形状からアーチ構造のインスピレーションを得ていたとも言われており、石工たちの活躍と共に現在も地域の誇りとして大切に守られている。



（写真右上）石匠館内に展示されている支保工模型。上部には石がアーチ状に並ぶ。木組みの土台の上に伐り出した石を積んでいき、最後に土台を抜くと石の自重でアーチが固定される
（写真左上）石匠館内の展示。石工の道具は実際に使用され、子孫によって寄贈されたものが多い
（写真左）石匠館館長 上塚 寿朗さん。背後に写る石匠館の外壁に凝灰岩が使用されている

地域一丸となって行う一大事業

石工とめがね橋の歴史について学ぶため訪れたのは、東陽町内にある「石匠館（せきしょうかん）」という施設だ。外壁はめがね橋に多く用いられた1万個を超える凝灰岩で覆われ、館内では八代における石造りの歴史や、めがね橋の構造を分かりやすく紹介した模型や映像の展示が行われている。出迎えてくれた館長の上塚寿朗さんによると、展示されている道具は、実際に石工たちが使用していたもので、その子孫である地域の人たちから寄贈されたものだという。

「現在では石工というと特殊技能を持った専門職のイメージがありますが、めがね橋造りが盛んだった時代の種山地域、東陽町の人々にとっては、特別な人の手による仕事というより地域全体で行う土木工事という認識でした。もちろん設計を担う天才的な石工の存在はありましたが、

めがね橋造りは谷を渡って隣村へと行くための大事なインフラ整備。農業を行いながらめがね橋造りにも地域総出で取り組んでいたようです」。

後年、種山地域の石工たちを総称して「種山石工」と呼ぶようになる。これは、彼らが活躍した当時からそういう集団の名称があったわけではなく、残された資料に「肥後」「八代」「種山」などの表記が見られたことから、彼らへの畏敬の念を込めて「種山石工」と呼ぶようになったものだ。「種山」という地名は現在も残っているが、これは「手永（でなが）」と呼ばれる行政区分のひとつ。この手永が種山、そして八代を石工の郷たらしめた基盤だと上塚さんは語る。

「江戸時代に肥後熊本藩で導入されていた地方行政制度で、規模で言えば『村』より大きく『郡』より小さいのが『手永』。領内をこの手永に区分し、その長にある程度の政策決定権を与えていました。通常、めがね橋を架けるとなれば莫大な費用が掛かりますし、谷に橋を架けるということは他藩などから攻め入られた場合に侵攻をスムーズにしてしまうデメリットもあるため、藩という大きな組織ではなかなか架橋を推奨できません。しかしコンパクトな行政区分である手永制度により意思決定がスムーズに運んだのだと考えられます。そしてめがね橋建設により物流が増えて経済状況が向上すると、手永の長の藩内での評価に繋がります。そうした藩の評価システムも、八代・熊本に他地域よりめがね橋が多くかけられた要因のひとつと言えるでしょう」。

めがね橋造りの最盛期は江戸末期から明治中期にかけて。木製の橋が一般的だった他地域に招聘されてめがね橋造りを行うが、やがて時代はコンクリート橋へと移っていく。

「西洋から導入されたコンクリート工事の技術に押され、建造費用・人員も膨大となるめがね橋造りの需要は急速に減少していきます。しかし耐久年数約50年のコンクリートに比べると、めがね橋は破壊されない限りそこにあり続ける。だって、石ですから（笑）。八代市の人たちにとってめがね橋は、土地開発により山や川、町の姿が変わっても、唯一変わらない故郷の風景として大切にされています」。

■石匠館　熊本県八代市東陽町北98・2　☎0965・65・2700
大人310円、高大生200円、小中生100円
休館日 月曜（祝日の場合は翌日）、12月29日～1月3日

（写真上）石橋の上にコンクリートを重ねているので車も通行できる。道幅は3.55m
■谷川橋　熊本県八代市東陽町河俣鶴中

（写真右）川のそばにある寺への参拝のため架かった橋も
■高原（たこら）橋　熊本県八代市泉町栗木

現在も愛され続けるめがね橋

八代市内を巡っていると、アスファルトで補強され車が通れる橋、今も集落の人たちの暮らしに欠かせない橋、人通りの多い場所に架けるからと欄干を付けてオシャレにした橋など、さまざまな表情のめがね橋に出合う。どの橋も、石で出来ているのに温かい雰囲気を持っているから不思議だ。

「八代の皆さんは、めがね橋が大好きなんです。子どもの頃は欄干に登って遊んだとか、橋の上はお母さんたちの井戸端会議場だったとか、楽しそうに話してくれますよ」と語る八代市文化振興課の村田仁志さんに案内されたのは、旧薩摩街道沿い、八代市の南の端にある「赤松第一号眼鏡橋」だ。山間の田んぼの間にある小さな橋だが、街道沿いに造ったものだからか、欄干の柱には扇面やお茶と急須などの彫刻が施され、旅人たちの目を楽しませていたことが想像できる。しかし令和2年7月、豪雨による河川の増水により流木などが押し寄せて欄干が崩れ、一部の石材はどこかに流されてしまった。

「現在も地域の人たちが使用する橋なので、すぐに倒壊の危険がないか専門家に調査を依頼しました。すると、飾り部分の欄干は崩れたものの、橋自体はこれくらいの衝撃では問題ないとのこと。『やっぱり昔の人たちはスゴイ』『これからも大事にせんといかんね』と皆さん感心しきりでした」。

豪雨水害は被災地域の人々にとって間違いなく災いだ。それでも先人たちが、子や孫の世代まで崩壊しない橋をと願って架けた石のめがね橋は、ここに立ち続けている。時を超え、めがね橋は八代の人々の心も繋いでいるようだ。

橋を渡って田んぼに毎日行く農家も
■赤松第一号眼鏡橋　熊本県八代市二見赤松町岩下

（写真右上）八代市文化交流課 村田 仁志さん。背後に写るのは水害により一部が修復された赤松第一号眼鏡橋の欄干。「一部といっても倒れた欄干を起こして一本を新しい石材にしただけ。水害の歴史を残すためあえて石材の色を変えています」（村田さん）
（写真右下）赤松第一号眼鏡橋の欄干に石工たちの遊び心。急須とお茶の彫刻
（写真左）神社に奉納された灯籠にも注目。胴をひねるように彫刻が施され石工の高い技術力をうかがわせる
■菅原神社のひねり灯籠　熊本県八代市東陽町北畑中

八代 石工列伝

八代市内に数多く点在している石造りのめがね橋。架橋には専業の石工だけでなく地域の人たちが総出で携わったが、彼らを指揮して大規模な工事を成功に導いた伝説的石工の名前は、今も敬意をもって八代の人々の胸に刻まれている。なかでも有名な3人のレジェンドを紹介していこう。

明治政府を感嘆させた当代一の石匠

橋本勘五郎

明治の始まり頃には、八代の石工の腕前は熊本外でも評判となり、遠く東京にも届いていた。風水害による橋の流失に悩まされてきた日本にとって、頑丈な石造りの橋はまさに希望の懸け橋。ついに明治政府から一人の石工のもとへ石造りアーチ橋の建設依頼が舞い込む。石工の名前は勘五郎。現存する石造りアーチ橋だけを見ても国内最大級の霊台橋（熊本県下益城郡美里町）や通潤橋（熊本県上益城郡山都町）の架橋工事を手掛けてきた人物だ。

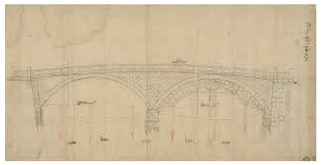
勘五郎は1822（文政5）年、北種山村（現・八代市東陽町）に誕生する。祖父の代からの石工の家に育った勘五郎（元の名は丈八。後に「橋本」姓を名乗る）は二人の兄と共に、腕のいい石工3兄弟として様々な石造りアーチ橋の建設に携わり、種山石工の中心的存在へと成長する。通潤橋建設の際、兄弟の中でも優れた技術を持ち一目を置かれていた勘五郎は設計を担当した。通潤橋は、水路として使うための通水橋だ。橋の中に石の管を通し、圧力差を利用したサイフォンの仕組みで川から水を汲み上げて田畑へと運ぶ。木造のように水を流しても腐らない石造りの水路橋。八代の石工の誇りを懸けた仕事を、勘五郎ら兄弟は見事成功させた。

時代は明治へと移り、1873（明治6）年に勘五郎は明治政府から招聘され、大蔵省の辞令を受けて上京、橋の建設を手掛ける。同年に完成させたのが、東京で初となる石造りアーチ橋「神田筋違目鑑橋（萬世橋）」。この時、招聘した時点より倍額近くにまで給金を引き上げられていることから、明治政府が勘五郎の技術の高さを認め、すぐさま評価を改めたことが分かる。こうして八代の石工の名声は不動のものとなっていった。

通潤橋

上京した際に撮影された橋本勘五郎の肖像写真

霊台橋


橋本勘五郎が明治政府に呼ばれ架橋に携わった江戸橋（現存しない）の設計図。勘五郎帰熊後に完成した

鹿児島人からも尊敬され続ける名工

岩永三五郎

橋本勘五郎の一世代前、近隣に種山石工の名を知らしめた名工が岩永三五郎だ。三五郎が設計した熊本初の通水橋・雄亀滝橋（熊本県下益城郡美里町）は、通潤橋のモデルになったといわれている。1793（寛政5）年、西野津村（現・八代郡氷川町）に生まれた三五郎は、橋の建設だけではなく水路建設や干拓工事においても能力を発揮し、肥後熊本藩から「岩永」と名を拝命している。大きな転機が訪れたのは、1840（天保11）年。三五郎が各地で手掛けためがね橋や土木事業の評判がきっかけとなり、薩摩藩から好待遇で招聘を受ける。そして錦江湾に流れ込む甲突川に五石橋と呼ばれる美しく頑丈な石橋群を完成させた。これまでシラス台地の脆弱な地盤のため頑丈な石を立てることが難しかった薩摩では、敷石で地盤強化を施すなど従来には無かったアイデアで石橋架橋を成功に繋げた三五郎を敬愛、現在も五石橋の一部を移築保存した石橋記念公園（鹿児島市浜町）を整備し、大切にしている。

石橋記念公園。三五郎が建設した西田橋など3橋を移築・復元している。西田橋は鹿児島城（鶴丸城）の表玄関として豪華に造られ、篤姫も江戸城への輿入れの際に渡ったという

■岩永三五郎の墓
熊本県八代市鏡町鏡村豊原

種山石工の開祖 レジェンド・オブ・石工

林七

日本で初めて建設された石造りアーチ橋は、長崎の眼鏡橋（長崎市魚の町）である。1634（寛永11）年の長崎。明から渡来した興福寺の二代目住職・黙子如上が指揮を執り、中国の石橋建設の技術をベースに橋を完成させた。その技術に感動し出島に出入りする外国人から建築法の基礎となる円周率の計算法を学んだといわれているのが、長崎奉行所に勤めていた林七だ。当時、外国人との個人的な接触は長崎の役人といえどもご法度。奉行所に目を付けられた林七は長崎から逃げ出し、種山村（現・八代市東陽町）へ流れ着いたとの言い伝えが地域に残される。「種山林七」と名乗るようになり、石工の技術を習得、子孫や弟子にアーチ橋の工法を伝えたという伝説の男。橋本勘五郎は林七の孫にあたる。林七のエピソードは文献に記されている史実ばかりではないので真偽は不明だが、ロマンのある話だ。

日本初の石造りアーチ橋、長崎市中島川に架かる眼鏡橋

種山に移り住んだ林七が最初に造ったといわれる小さなめがね橋。素朴な造りだが、種山石工始まりの橋だと思うと感慨深い
■鍛冶屋上橋　熊本県八代市東陽町北西原

笠松橋

橋本勘五郎（建設当時：丈八）により明治期に建設されたといわれている。笠松橋公園として整備されているので訪れやすく写真愛好家にも人気の撮影スポット
■熊本県八代市東陽町河俣

（写真右）秋が深まると橋のたもとの大銀杏が鮮やかに色づく
（写真左）切り出した石の形を選別し組み合わせる。苔むしたいぶし銀の雰囲気が素敵

鹿路橋（ろくろ）

八代市内のめがね橋の中でも大きなもので、橋本勘五郎の父・橋本嘉八により1848（嘉永元）年に建設されたと伝わる。橋の名前通り、野生の鹿が橋を渡ることも
■熊本県八代市東陽町河俣

小崎眼鏡橋

1849（嘉永２）年架橋。地域総出で建設された集落を繋ぐ橋で、現在も生活道として活躍している。小さい橋ながら欄干まで造られていて、当時の人たちにとって大事な橋だったことがわかる
■熊本県八代市坂本町中谷い小崎

（写真上右）洗練されているわけではない素朴で可愛い欄干。村人たちが自らの手で完成させた深い愛情が見える
（写真上左）橋のたもとにある石造の看板。「この橋車通るべからず」と刻まれている。後年、馬車や荷車などが頻繁に往来するようになってから建てられたもの

石の町の Q&A

石工の郷・東陽町から始まり伝説の石工たちの軌跡を追ってきたが、そもそも八代市でめがね橋を含む石造り文化が発展した背景には何があるのだろう？その理由を探るため、八代市立博物館未来の森ミュージアムの鳥津亮二さんに質問してみよう。

Q 八代市で石造り文化が発展したのは何故ですか？

A めがね橋は石工たちが建造した大いなる財産ですが、それは彼らが行った事業のほんの一部です。石工たちが担っていたのは、もともと主に八代地域の大規模な干拓工事。それに伴い水路や樋門を頑丈な石で築く必要があったため、八代地域では石を材料とした土木工事が活発に行われました。干拓工事だけでなく、球磨川・氷川流域は水害の頻度が高いため、土木工事の数が他地域と比較して多く、石を扱う技術が向上していったのでしょう。めがね橋を作るには、石工としての高い技術が必要となりますが、経験豊富な八代地域の石工たちだったからこそ多くの橋を建設することが可能だったといえるかもしれません。

八代平野は 2/3 が干拓によって生まれたといわれる

Q どうして水害の多い土地に街づくりを行う必要があったのでしょう？

A 八代市は、球磨川の流れがすべて集中する河口という土地柄、大雨や台風による水害には常に悩まされてきた場所。それでも江戸時代以降、精力的に堤防や干拓工事を行って都市を築き上げた理由は、それだけこの土地が権力者たちに重要視されていたからです。古くから東アジアとの交易も行われた海運拠点の八代港を有し、肥後と薩摩を結ぶ交通・物流の要所でもある、さらに江戸時代、中央政権にとっては薩摩に対する前衛基地としても八代の地は重要だったのです。現代も九州全体の交通・物流の要であり続けている点を見ると、八代市の地理的優位性の高さは普遍的なのだと思います。そんな八代市に安全な都市を築くため、頑丈な石を使った土木建築技術が発展し、その発展した技術でめがね橋などの石の建造物が造られていきました。

Q 材料となる石材は、どこから運ばれたのですか？

A これも石造り文化の発展に欠かせない要因ですが、八代地域では、石の建造物の材料となる凝灰岩や石灰岩が豊富に産出されていたのです。阿蘇山の活発な火山活動により大昔に堆積した阿蘇溶結凝灰岩が地層の隆起により地表近くに露表している場所が数多くあり、人々は建設地のそばで切り出して石材として使用することができました。この地形的優位性も、八代の土木工事の発展を大きく支えた重要ポイントです。

石匠館のある八代市東陽町内の山中に石切場の跡である石垣が残る

Q 当時、石工たちはどのような評価を受けていたのでしょう？

A 石工といっても、歴史に名前が残っているのはごく一部の棟梁だけ。あとは地域の人たちが総出で工事にあたっていましたから、石工と呼ばれる人たち全体が特別な評価を得ていたわけではないと思います。現代の私たちが、有名建築家の名前は知っていても現場で働く建設作業員ひとりひとりのことは知らないのと同じですよ。ただ世に不可欠な仕事であることは今も昔も変わりません。こうした名もなき石工たちによって八代の石造り文化は成熟していきました。

八代市立博物館
未来の森ミュージアム
鳥津 亮二さん

■八代市立博物館未来の森ミュージアム
熊本県八代市西松枝城町 12・35
☎0965・34・5555
大人 310 円、高大生 200 円、中学生以下無料
休館日 月曜（祝日の場合は翌日）、年末年始

ユネスコ無形文化遺産 八代妙見祭

出し物のひとつ「亀蛇(きだ)」。亀と蛇が合体した想像上の生き物で、妙見神が亀蛇の背に乗り中国から海を渡ってきたという伝説に因む。動かす際は甲羅部分に4人が入って支え、1人が首を持ち上下に動かす。八代では「ガメさん」と呼ばれ愛される存在

■八代神社(妙見宮)
熊本県八代市妙見町 405
☎0965・32・5350

奉納される「傘鉾」は、「菊慈童(きくじどう)」を先頭に全部で9基。江戸時代に造られ各町によって守り継がれている。台車を合わせて高さ約5メートル。金属の釘を1本も使用せず組み立てられている

毎年11月22日、23日の2日間にわたって行われる八代神社(妙見宮)の祭礼。神幸行事のメインのひとつである23日の「お上り(のぼ)」では、獅子を先頭に傘鉾(かさぼこ)や神馬(しんめ)、甲冑武者、亀蛇(きだ)、流鏑馬(やぶさめ)など絢爛豪華な出し物の行列が続く。祭りの日程は大正11年より2日間に延長されているが出し物の華やかさや規模は江戸時代から変わることなく受け継がれている。石を使った干拓工事で大いに栄えた八代。その経済的余裕が、豪華な出し物の奉納を可能にしたのだろう。

Topics !

楽しく学ぶミュージアム「お祭りでんでん館(八代市民俗伝統芸能伝承館)」

館内エントランスホールの壁には、江戸時代後期に制作された「妙見祭礼絵巻(八代神社所蔵)」の一部が描かれている。敷地内の広場では各種イベントなども催される

八代城跡そば、2021年にオープンした八代市民俗伝統芸能伝承館、通称・お祭りでんでん館。ここでは妙見祭の歴史や神幸行列の成り立ちなどが映像や展示で紹介されている。うねるような屋根の形は妙見祭の出し物を表現しており、エントランス(無料ゾーン)では伝統芸能をテーマにした飛び出す絵本の展示、タッチパネル形式のデジタル絵巻などを自由に見ることができる。展示の目玉は、実際に妙見祭で奉納されている傘鉾の実物展示と、三方向から立体的に映像を放映する「お祭り体験シアター」。また、妙見祭だけではなく八代市内で守り継がれている祭りや神楽などの伝統芸能の数々、日本遺産「八代を創造した石工(たがや)たちの軌跡〜石工の郷に息づく石造りのレガシー〜」についても紹介している。

(写真右)祭りの映像を立体的に放映する「お祭り体験シアター」で、傘鉾の実物展示が行われている。通常は解体して保管されているが、交代で1基を組み上げ展示　(写真中)2階展示室では豪華な刺繍が施された傘鉾の水引幕や江戸時代に造られた木彫りの装飾を間近に見ることができる　(写真左)エントランスに展示されている飛び出す絵本。八代市内の祭りや踊りなどを楽しみながら学ぼう

■ お祭りでんでん館(八代市民俗伝統芸能伝承館)
熊本県八代市西松江城町1・47　☎0965・37・8737　大人300円、高大生200円、中学生以下無料　休館日 月曜(祝日の場合は翌日)、年末年始

八代、干拓の地を巡る

「世界は神が作ったが、オランダはオランダ人が作った」。国土の1／5が干拓地のオランダの誇りと愛国心を象徴する言葉だが、平野部のおよそ2／3が干拓地という熊本県八代市にもこの言葉が当てはまる。八代海に注ぎ込む球磨川の河口部に位置する八代市。九州新幹線の車窓から広大な八代平野を見て、ここがかつて海の底だったことを誰が予想できるだろう。

八代平野は、球磨川や氷川などの河口部に生まれる三角州・扇状地によって形成されている。なかでも日本三大急流のひとつに数えられる球磨川は、人吉盆地を貫流し八代に肥沃な土を運んでくる。河口部分では広大な干潟が形成され自然陸地化。さらに人の手による小規模な新地開発が行われ、八代平野は徐々に広がっていった。それが大規模化したのは江戸時代に入ってからだ。

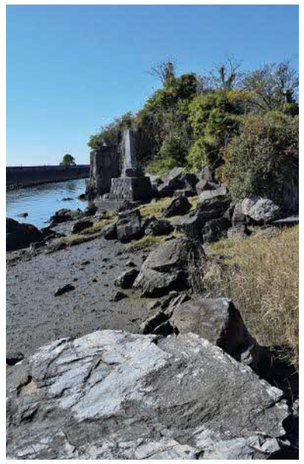
誰が干拓を行ったのかは諸説あるが、加藤清正築造と言われている新地開発は1608（慶長13）年に始まる。加藤氏時代に約160ヘクタールが干拓により陸地化、細川氏時代に入ると約200年間で400ヘクタール以上が干拓により陸地化している。東京ドームの敷地に換算して855個分以上。当然、大規模な干拓工事には相応の費用と人材が投入されるのだが、これだけの土地を山を拓かずに開発が出来たのだから、沃土を運んでくれる球磨川の恩恵がいかに大きかったかが分かる。明治以降も干拓工事は継続され、現在の八代平野が形成されていった。しかしいくら球磨川が肥沃な土を無尽蔵に運んでくれるとはいえ、干拓のためには堤防を築き海を堰き止め、用水路を網の目のように張り巡らせて地中の塩分を抜くという大掛かりな土木工事が必要となる。そして干拓による新地開発がこの地に何をもたらしたのか。現在の八代市を巡り、当時の土木技術力に触れてみよう。

球磨川河口に広がる干潟。越冬する渡り鳥など野鳥が集まるため、バードウォッチングを楽しむ愛好家たちに人気のスポット

水島。新地開発の際に干拓地に取り込まれる予定だったが、有名な景勝地であることから計画を変更。島を残して干拓が行われた
■熊本県八代市植柳下町字水島 50

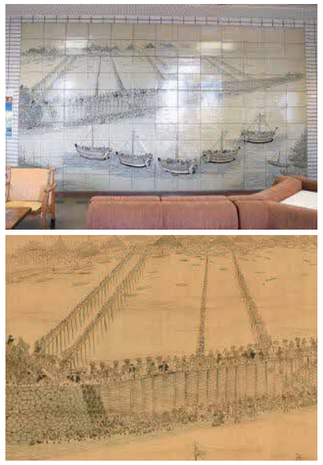
八代の干拓工事を成功に導いたもの

八代海で干拓工事が成功したのには秘密があるという。訪れたのは、球磨川河口の堤防からわずか数メートルの場所にある水島。小さな島には龍神を祀る小さな神社が建てられており、桟橋を渡って上陸することが出来る。実際に渡ってみると、水島が石で構成されている小島だということが分かる。この石は城郭などにも使われる頑丈な石灰岩。その特徴である白い岩肌が露頭している。通常であれば石灰岩の埋まっている地層まで掘り進めて採取する労力が必要だが、地層がうねるように隆起していることで石灰岩が自然と露頭。採集も工事現場までの運搬も船で行うことができる。すべて人力で工事を行う当時においては非常にありがたかったことだろう。採取された石材は船ですぐそばの干拓地の現場に運ばれ、波を受けても風化しない堤防の石垣となった。八代海を見渡すと水島のような小島がいくつも八代海に点在しているのが分かる。なかには干拓地に取り込まれて陸続きとなった島もあるという。



水島には石灰岩がゴロゴロと転がっている。神社から島に下りることが出来るが、足元には注意

次に訪れたのは、江戸時代から明治時代にかけていくつも建造された石の樋門（ひもん）だ。樋門という言葉に聞き馴染みがなければ、水門と理解してほしい。八代海の干拓工事は、大潮の日、海水が大きく引いている間を狙って干潟に堤防を築く。その時点ではまだ堤防の内側にも海水が残っているが、堤防に作られた樋門は陸から海へ向かう力で開き、逆に海から陸へ押し寄せる力で閉じるため、海水が戻ってくるのを防ぎ干潟を陸地化することができるのだ。水島から車で15分ほどの場所にある大鞘樋門群（おさやひもんぐん）。門の周囲を固める石灰岩の石垣が美しく積み上げられている。両隣には民家が見えるが、かつては樋門がスムーズに開閉できるよう管理する役割の人が住んでいたという。この樋門の特徴は、城郭に使われるような巨石を用いた堅牢さだ。球磨川の氾濫と共に生きてきた八代の人たちは、干拓工事に加えて堤防の補強や氾濫した川の護岸工事など、他の地域と比べると圧倒的に土木工事を行う頻度が高かった。より頑丈さを求めて石の加工技術も発達したのだろう。美しく切り揃えられた樋門の石積みに、この地で生きる人々の試行錯誤が



（写真上）八代市鏡支所の館内には干拓工事の様子を描いた『汐留図』を陶板にして展示している
（写真下）『汐留図（部分）』個人蔵（写真提供：八代市立博物館）
■熊本県八代市鏡町内田 453・1

（写真右）旧郡築新地甲号樋門（きゅうぐんちくしんちこうごうひもん）。明治時代に建造された樋門。美しい 10 連アーチが特徴
（写真左上）大鞘樋門群（おさやひもんぐん）、殻樋（からひ）。1819（文政 2）年、鹿子木量平による大規模干拓の際に設けられた
（写真左下）大鞘樋門群、二番樋（にばんひ）。通常は城郭に使われるような巨石を加工している
■旧郡築新地甲号樋門　熊本県八代市郡築三番町
■大鞘樋門群　熊本県八代市鏡町両出／八代市千丁町古閑出

石工たちの足跡

長い年月をかけて八代の地で行われてきた干拓工事。大いなる干潟を有する八代ならではの事業は、広大な耕作地を生み出しただけでなく土木工事技術を大きく向上させた。磨き上げられた石工たちの技の数々は、現在の八代市内の市街地や山間部など様々な所で見つけることができる。削り出した石の表面に、重ねた石垣の重厚さに見える、街づくりへの情熱。石工たちが残した重要なレガシーを探しに、八代市へ出かけよう。

八代城

白く美しい石垣から「白鷺（しらさぎ）城」とも呼ばれた。熊本地震の際に一部が崩落したが、現在は修復されている
■八代城跡　熊本県八代市松江城町7・34

1619（元和5）年当時の八代城（現・麦島城跡）が地震で崩壊したため、一国一城令の特例として1622（元和8）年に築城された八代城。大天守は築城から50年後に落雷により消失し、その後は再建されることなく現在に至る。石垣は近隣から産出する石灰岩が主に使用されており、白く美しい石肌が現在も見える。城内で足元を見ても石灰岩が数多く残されている。周囲の水堀は球磨川の流れを引き込んだもので、水が循環するため常にきれいな水が湛えられている。

城下町

八代城跡から球磨川へは旧薩摩街道が真っ直ぐに伸び、その先に石工たちが築いた堤防、船着き場があった。現在目にすることができる「徳渕の津跡（写真右）」は、八代城と同じく石灰石が使われている。他にも現在の町を歩けば、駐車場の石垣（写真左）や堤防跡など、至る所に石工たちの仕事が残る。

棚田

種山地域（現・東陽町）には地形を利用した美しい石積みの棚田が残り、現在も地域の人たちに活用されている。石工たちの仕事が人々の暮らしを支え続けてくれている証だ。現在は生姜の栽培が盛んに行われ、地域の特産品となっている。

■美生（びしょう）の棚田
熊本県八代市東陽町河俣美生 ※棚田は私有地なので中に入るなどのマナー違反は禁物

『文政七年八代御巡検道筋図』八代市立博物館所蔵。黄色部分が干拓地。球磨川と氷川から用水路が山際に沿って引かれている（編集部で一部加工）

見えるようだ。

では実際に干拓により生まれた農地へ行ってみよう。ここは干拓の父と呼ばれる江戸後期の惣庄屋・鹿子木量平（かなこぎりょうへい）（P22）が祀られた文政神社だ。大きな銀杏の木がそびえている神社なのに落ち葉はきれいに掃き清められていて、現在も量平が地域の人たちに大切にされている様子が分かる。この場所は、量平が指揮を執った3度の大規模干拓工事の中心地。境内に立てば、目の前に平坦な農地が広がる。勾配のない平坦な干拓地に水を送るため、八代を挟むように流れる球磨川と氷川から山沿いに用水路の主流が築かれた。そして主流から海側に広がる干拓農地へ支流が引かれ、平野全体を潤したのだ。水を縦横無尽に走らせる用水路建築は、八代の高い土木技術があったからこそ実現したものといえる。

干拓の父・鹿子木量平を祀った文政神社。周囲には稲やい草の農地が広がる
■熊本県八代市鏡町両出

球磨川から水を引き入れる用水路の入口

『鹿子木量平像』個人蔵（写真提供：八代市立博物館）

干拓の神となった男

鹿子木（かなこぎ） 量平（りょうへい）

1753（宝暦3）年 ― 1841（天保12）年

干拓工事が積極的に行われ始めたのは加藤清正が肥後国領主として入国した江戸時代からだ。後に細川氏が藩主となって以降も大規模干拓は継続的に行われていった。いくつもの干拓工事を成功に導き細川家からも信頼を寄せられていたのが、鹿子木量平である。「干拓の父」と呼ばれ、文政神社にも神様として祀られている量平。彼はその生涯で何を遺したのか。八代市立博物館未来の森ミュージアムの学芸員・鳥津亮二さんに尋ねてみた。

窮地を救うためのキーマン

量平は1805（文化2）年に「百町新地」と呼ばれるおよそ90ヘクタールの干拓工事を成功させる。この功績により細川家の信頼を得た量平は、藩営の大規模干拓工事を任されるようになる。彼は元々土木工事のスペシャリストだったのだろうか。

「量平は八代ではなく熊本の生まれです。庄屋として村民たちの暮らしを守り、飢饉や〝島原大変・肥後迷惑〟と言われた雲仙岳噴火の時は民衆の救済に奔走。藩からも一目置かれていた人物です。そんな量平が、肥後国一番の貧地と言われた八代の野津手永（細川藩独自の行政区分。郡より小さく村より大きい規模で、領主の惣庄屋（そうしょうや）にはある程度の自治権が認められていた）へ抜擢されたのは、藩の財政立て直しと食糧不足という問題を解決してほしかったのでしょう。量平が惣庄屋（手永の管理をする役人）として干拓を成功させたのを見て、細川氏は藩営の干拓工事を一任しました」。

高いプロデュース力で民衆を動かす

数々の大規模な干拓工事を成功に導いた量平だが、彼自身は石工や大工の棟梁ではなく現場の指揮を執る総監督のような立場。実際に石工の技術を身に付けていたのは、量平の息子である謙之助だったという。

「量平は、高い技術を持つ石工集団として全国に知られていた備前石工のもとへ謙之助を派遣し、学ばせました。父がプロジェクトの計画を練り、息子が現場をまとめる。それが鹿子木量平・謙之助親子のスタイルです。謙之助が石工同士の交流を深めていたこともあってか、八代で樋門を作る際には備前石工が技術協力をしてくれたようです」と鳥津さん。さらに量平のプロデュース力は、ある人物の後の評価にも影響を与えたのだとか。

「実は量平は、築城の名手といわれた加藤清正を深く尊敬しており、大きな干拓工事の前には成功祈願をしていました。成功のお礼として清正を祀った貝洲加藤神社を建立。熊本にある加藤清正の菩提寺には、誰もが驚くような巨石を奉納したことも。尊敬する清正に、干拓に携わる自分の仕事を見てもらいたかったのかもしれませんね」。

土木治水の名手とも称えられることの多い加藤清正だが、実はそのイメージの浸透に量平も一役買っているという。

「量平は、分かりやすく言うと加藤清正の大ファン。清正の功績を讃えに讃えた『藤公偉業記』という本も書いています。偉業記という名の通り、清正が手掛けたとされる治水や干拓事業を絶賛しているのですが、この本が当時大ブームを巻き起こします。史実通りかというと…少し話を盛っている気もしますが（笑）、それほど憧れの存在だったのでしょうね。そのブームが後世の私たちの加藤清正のイメージに影響を与えている部分があるのかもしれません」。

八代市立博物館 未来の森ミュージアム
学芸員 鳥津 亮二さん

鹿子木量平を祀った文政神社（P19）の隣には鹿子木量平・謙之助親子の墓碑がある

（写真上）畑の奥の石垣が、鹿子木量平が手掛けた干拓工事の際に作られた七百町新地潮請堤防。現在も一部が残り町の風景に溶け込んでいる
（写真下左）加藤清正が築いた熊本城（復旧後）。清正は築城だけでなく治水・干拓工事などにも優れた手腕を発揮した【写真提供：熊本城総合事務所】
（写真下右）八代市内にある貝洲加藤神社。秋季大祭では干拓地の特産物であるい草を使った造り物が奉納される

■八代市立博物館 未来の森ミュージアム
熊本県八代市西松江城町 12・35　☎0965・34・5555

■貝洲加藤神社
熊本県八代市鏡町貝洲 699

芝口大鞘節保存会

大鞘節

硴原子ども会おざや名所保存会

八代新地大鞘節保存会

干拓の町に誕生した

民俗芸能

干拓工事には八代の領民たちだけでなく天草や芦北などからも多くの労働者が集められた。土を盛り石を積む重労働の日々。人々は労働歌を口ずさみながら作業を進めたという。また労いの宴の余興や娯楽のために独自の踊りが生まれることも。そんな干拓工事から生まれた民俗芸能の数々を紹介していこう。

芝口棒踊り

女相撲

働く人々が生んだ民謡

「大鞘節」

茶摘み歌や田植え歌など、延々と続く肉体労働の現場では、作業をスムーズにし、うっ憤を晴らすような作業歌がある。作業現場の監督役を揶揄したり、作業のつらさを嘆いたりと内容は様々だが、八代の干拓においても「大鞘節（大鞘名所）」という民謡が江戸時代には誕生していたと言われる。歌詞は8番まで作られていて、飲み水が少ないことへの不満や、出稼ぎにきて出逢った男女の恋模様などが唄われている。この民謡に踊りがつけられたのは後年になってからのこと。現在は芝口大鞘節保存会など地域の人々で構成される3団体の保存会によって踊り継がれている。鍬を持った男役の「潟切り」と、天秤棒を肩に担いだ女役の「潟担」による息の合った動きが観客を楽しませる。

大鞘樋門群（P18）のそばに建つ「大鞘節発祥記念碑」

勇壮な踊りで祭りを盛り上げる

「芝口棒踊り」

八代の領民に留まらず、海を挟んだ天草や近隣の芦北などからも多くの人が八代へ入植し、干拓工事に従事した。それにより他地域の様々な風俗・文化が八代に流入。この棒踊りも収穫祭の奉納踊りや娯楽のための踊りとして根付いたといわれている。一度は担い手不足により廃れたが、昭和時代に入り復活している。

力士の雄姿を女性たちが伝える

「女相撲」

1855（安政2）年に行われた新田開発の際、海水を遮る堤防の造成工事が難航した。その窮地を救ったのが、近隣の村から呼ばれた屈強な力士たち。四股で鍛えた足腰で力強く盛り土を踏み固めたおかげで無事に堤防は完成したという。いつの頃からか、その様子を再現し、力士に扮した女性たちが龍神社（熊本県八代市千丁町古閑出）の秋季大祭にて相撲を奉納。土俵を踏み固める地固めの儀式や相撲甚句、取り組み、横綱の土俵入り、弓取式などが行われる。

八代地域で守り継ぎたい伝統です。

大鞘節に現在の踊りが付けられたのは昭和に入ってからのことです。保存会ごとに節回しなどが異なるのも、地域性が出ていて面白いですよ。私が会長を務める芝口大鞘節保存会は、60年ほど前に芝口という地区の女性たちが立ち上げた団体で、現在は踊り手が10名、三味線やお囃子などを合わせて全15名で活動しています。イベントやお祭りなどで踊りを披露していますが、地域の子どもたちにも指導する機会を作るなど、未来に伝統を繋ぐ活動も行っていきたいですね。

（芝口大鞘節保存会　会長 宮崎 富子さん）

干拓の恵みは現代に続く

人口増加による食糧不足など様々な理由から、干潟を耕作地にするための干拓工事が各時代ごとに行われ、米の収穫量は増加。干拓地という特性を活かした農産物の栽培も積極的に行われた。その代表格「い草」は生産量日本一へ。そして、ミネラル豊富な土壌を活かした「トマト」の栽培も盛んに行われている。

八代海からの海風を受けて、干拓の平野に緑の波が立つ。畳業界では現在、海外からい草が輸入されているが、香り高く高品質な八代い草は変わらずに評価が高い

©2017 熊本県いぐさ・畳表活性化連絡協議会 IGSAPHOTOLOG

い草

国産畳の原料、シェア9割！

国産畳の原料となるい草（畳表）の9割は熊本産で、そのほとんどが八代平野で生産されている。八代でのい草栽培の歴史は長い。室町時代、1505（永正2）年に八代の上土城（城跡に現在は岩崎神社が建つ）の城主となり地域を治めた岩崎主馬守忠久が、水はけの悪い八代の土壌でも栽培しやすい農作物としてい草の生産を推奨したことに始まると言われている。八代の干拓地は用水路を整備し球磨川の水を平地に行きわたらせ塩抜きをすることで稲作も可能な農耕地となったが、い草は土壌の塩分にも強く、八代の地に適した作物。江戸時代になると細川藩により積極的ない草栽培の推奨が行われた。

かつて畳は公家や大名など高い身分の者の屋敷などにしか使用できなかったが、江戸時代以降は住宅事情も徐々に変化し、一般家庭に浸透していった。昭和時代に入ると畳を織る機械の登場により、生産量は急激に増加。需要も大幅に拡大し、八代という広大な生産地を有する熊本産畳は全国にその名を轟かせていった。

（写真上）い草は、米と同じように水田に植えて栽培する。収穫時期の7月頃になると全長150cm以上に成長する
（写真下）八代い草の父・岩崎主馬守忠久が祀られた岩崎神社。春の例大祭ではい草生産者などが参列し、その年の豊作を祈る

■岩崎神社
熊本県八代市千丁町太牟田

トマト

干拓地だからこそ生まれた極上の甘み

塩トマトの中には糖度が10度を超えるフルーツ並みの甘さのものも。八代市内では特産品のトマトを使ったケチャップなどの加工食品やトマトラーメンといった名物料理が人気

熊本県はトマトの生産量日本一。寒い時期に収穫される冬春トマトについては8割が八代地域で栽培されている。JAやつしろのブランド『はちべえトマト』は甘みが強いと評判だが、土中の塩分濃度の高い地域ではさらに甘みの強い『塩トマト』が栽培されている。トマトが土に根を張り成長する際、塩分濃度の高い土壌だと吸い上げる水の量が少なくなる。成る実の大きさは小さくなるが、養分が凝縮して糖度の高い塩トマトが生まれるのだ。八代の干拓地では所々で水脈の下から塩分が上がってくる部分があるが、その場所では特に甘みの強い塩トマトが実る。収穫された塩トマトは、東京など都市圏の百貨店や高級飲食店などでも扱われている。